

至誠通天

藤井 勇治

※至誠通天
誠を尽くせば天が
味方してくれること



長浜駅前再開発

「えきまちテラス長浜」完成

実に半世紀ぶりに長浜駅周辺の再開発を進めています。そのシンボルとなる駅前ビル「えきまちテラス長浜」がグランドオープンしました。関係者の皆さんのご尽力により長浜市の玄関口である長浜駅前に、本市のまちづくりや歴史や風土を感じさせる素晴らしい施設が完成したことに感謝しています。まちづくり準備会の設立から約5年間ものご苦勞に心より感謝申し上げます。

えきまちテラス長浜は5階建てで床面積は約5,000㎡。さらに産地直売のマルシェやライフスタイルカフェも並びます。マルシェでは地元産の野菜や果物、しょうゆ、豆腐などこだわりの加工食品を販売。さらに大きな特徴は「ライブマルシェ」でスタッフが店内で調理して販売します。また、カフェでは大型スクリーンがあり、様々な研修や体験講座の利用もできます。さらに、インテリ



▲えきまちテラス長浜

ア小物の販売店、学習塾、フィットネスクラブなどの店舗が並びます。イベント広場や木のおもちゃで遊べる子どものスペースや授乳室もあり、子育て世代の皆さんも安心して利用できます。このえきまちテラス長浜が大勢の市民や観光客の皆さんに愛され、長浜駅前の新しいシンボル、そして人々が集い憩う場所として笑顔と活気あふれる拠点となるものと確信しています。

市立病院通信⑦

お元気ですか



長浜病院
訪問看護ステーション
管理者 湧口 朋子

ご家庭での療養生活を支援します

皆さん、訪問看護をご存じでしょうか。訪問看護とは、病気やしょうがいを持った人が住み慣れた地域、ご家庭で療養生活を送れるように、専門の看護師等が生活の場へ訪問し、病状や療養生活を看護師の目で観察し、適切な判断に基づいた看護ケアを提供することです。自立への支援を行うサービスです。訪問看護ステーションは24時間体制で相談に応じ、急変時はかかりつけ医と連携し、必要な場合には訪問し、入院中から病院と連携して自宅への退院を支援し、医療機器をつけた人の療養生活を支えることもできます。

最近、自宅で最期を迎える人が増えています。自宅で最期を迎えたい、迎えさせたいという希望に寄り添い、苦痛なく過ごせるように、また家族が不安な

く看取ることができるよう支援しています。ケアマネージャーや他職種と連携し、様々な在宅ケアサービスの調整を行い、介護予防や機能回復のお手伝いもしています。当ステーションには、看護師10人と理学療法士1人がおり、院内の専門・認定看護師を中心とした各部署と連携し、質の高い看護の提供に努めています。今年4月からは、利用者から要望の高かった訪問リハビリテーションも開始しました。医療保険・介護保険双方から対応し、赤ちゃんから高齢者まで年齢に関わりなくご利用できます。是非、お気軽にご相談ください。



市立長浜病院
(☎68-2300(代表))

ながはまの文化財

あめのもり ほうしゅう

雨森芳洲 特集

今秋の雨森芳洲関連資料のユネスコ「世界の記憶」登録に向けて、10月号までながはまの文化財のページで雨森芳洲の紹介をします。

芳洲の国際感覚② 国に尊卑があるならば…

20歳代に中国語を、30歳代に朝鮮の言葉を学び、3か国語を操った雨森芳洲は、当時まれな国際人でした。芳洲は、朝鮮通信使一行に通訳などのため、対馬・江戸間を2回同行しました。また、釜山にある対馬藩の外交施設「草梁倭館」への赴任・留学も経験し、朝鮮の人たちとの交流を深め、それらの経験の中で、独自の国際感覚を持つようになりました。

芳洲は儒学者でしたが、当時の儒学者たちの一般的な考えである、中国を絶対視する考えは持ち合わせていなかったようです。芳洲が68歳の時に著した随筆『たはれ草』には、「国の尊きと卑しきとは、君子小人の多きと少なきと、風俗の善し悪しとにこそ拠るべき。中国に生まれたりとて、誇るべきにもあらず。また夷狄に生まれたりとて、恥ずべきにしもあらず」と説いています。

つまり、「国と国には、はじめから優劣は存在しない。中国だからといって、すべてが優れ、他の国のすべてが劣っているわけではない。国に尊卑があるとすると、そこに住む人、一

人一人の人間の器量や、風俗の善し悪しによるべきである。ただ単に中国に生まれたからといって誇りにすることは間違っているし、たとえ後進国(日本)に生まれたとしても、なんらそのことを恥じる必要は無いのである」と明快に述べています。

また、芳洲は言葉についても同じような考えを持っていました。当時、漢字に対して、ひらかな・カタカナやハングル文字は「下等」と考えられていましたが、芳洲は違いました。芳洲は、朝鮮のことを学ぶため、ハングル文字の学習にも取り組みました。彼が実際に書いた文字も残っています。

芳洲は漢詩と和歌について表現は違いますが、その本質は同等であると考えていました。「詩は漢語の精華なるものなり、歌(和歌)は和語(日本語)の精華なるものなり」。ここにも彼の、文化の違いに優劣は存在しないという、揺るぎない価値観を見ることができます。

通信使として来日した李東郭や玄錦谷らとは、帰国後も異邦の莫逆(国境を越えた親友)として終生親交を温めました。そのことは、芳洲が国や民族の垣根を越えて、心の交流を交わした証しといえましょう。

芳洲子どもミュージカル

郷土の先人・雨森芳洲の生涯や思想について、ミュージカル形式で、富永小学校の全児童が参加して演じます。子どもミュージカルの応援として、地元住民の人々も合唱団を結成して参加し、学校と地元住民が一体となって取り組んでいます。観覧自由。

【とき】

11月11日(土)
10時30分

【ところ】

富永小学校
(高月町井口)



▲ミュージカルの様子

シンポジウム

『「世界の記憶」を地域でどう活かすか(仮題)』

雨森芳洲関係資料のユネスコ「世界の記憶」登録申請にあわせ、先に登録された自治体等の人々を招き、「世界の記憶」を地域でどう活かすか」をテーマにシンポジウムを開催します。

【とき】

11月12日(日)13時30分

【ところ】

木之本ステイックホール
(木之本町木之本)